

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 王徳標

テーマ： 4.日中間の交流

私たちは幼いころから、日中両国が一衣帯水の隣国であることを知っている。両国には古の時代から密接な交流があり、鑑真が日本に渡ったのもその実例の一つである。しかし近代以降、両国は戦争を経験したことにより、それ以降の交流の減少をもたらした。両国の国交正常化45周年の今年にあっても、交流はまだ不足しているという現状である。

中国駐日大使館からの説明によると、2016年、日中両国合計で約900万人の行き来があったが、中国から日本を訪れた人数は600万人に達したのに対し、日本から中国を訪れたのは300万人に満たない数字となっている。これは多くの中国人が日本及び日本の文化を知ろうとしているのに対し、日本人、特に若者の中国への情熱は低く、両国間の交流は未だ楽観できないことを意味している。

ホストファミリーとの交流では、日本の若い世代の中国への知識の少なさ、ひいては中国への誤解というものを感じた。この点については、メディアの報道の原因もあるが、それとともに日中両国の交流不足も大きな原因だと言える。十分な意思疎通や交流なくしては、互いの情報の信憑性と正確性を保証することはできないのである。今後、両国がこれまで以上に交流や提携を深め、中国人が真実の日本を、また日本人が真実の中国を知ることができるよう願っている。

個人的な視点で言えば、私たちは日本での学習や交流の機会にできるだけ多くの日本の文化や伝統を体験し、日本人の性格や特徴を知る必要がある。また学校の視点で言えば、可能な限り交流や提携を強化し、双方の青年に対話の場を設ける必要がある。そして国の角度で言えば、私たちはメディアや書籍などに真実の日本を紹介させ、両国の提携を強化し、共にアジアの台頭を促進していく必要がある。

このほど日本の安倍首相が一带一路へのサポートの意向を示したことが日本のメディアなどで大きく報じられ、両国の交流により良い条件をもたらした。今後日中両国の各方面は互いに手を取り合い、交流促進のためそれぞれの貢献をしていかなければならない。

大学名： 清華大学

氏 名： 顧欣宇

テーマ： 1.国民性についての理解

8日間の旅を通じて、私は日本の経済、政治、文化等様々な面について体験し、多くの感銘を受けた。以下にいくつか述べたいと思う。

一つめは、日本は非常に発達した国で、経済も発展し、人々は物質的にも豊かで、精神面では平等と博愛を重視している。「人々の平等、人間本位」の考え方は日本人の生活のあらゆる面に浸透しており、それは企業運営においても例外ではない。企業の命名にしても日本人の平等への意識が表れている(三井住友銀行)。そして従業員の多くが障がい者であるオムロン京都太陽株式会社を見学した際は、その思いはより強くなった。同社では障がい者に対して物質的な単純な福利ではなく、精神的な満足感をもたらすべく様々な工夫をしている。例えば工場内の各機械

の配置などは身体にハンデを持つ従業員のために工夫されたもので、同社は彼らに生存の権利のみならず、生活の権利や尊厳をもたらし、従業員に労働を通じて自分の生き甲斐を実現できるよう配慮している。しかも身体にハンデを持つ彼らの給与待遇はその他一般の人と同等である。こうした点は中国国内の企業や慈善事業機構が学ぶべきものである。

二つめは、日本は時間にとっても正確な国で、今回の訪日におけるあらゆる活動は全て事前に定められたスケジュールに基づき正確に行われた。見学先の企業もまた、私たちが時間を無駄にすることのないよう事前に私たちを出迎えており、見学においてもスケジュールを厳守していた。それに比べて、私たちは日頃校内で会議を行う際、いつも遅刻をする人がいて、それが当たり前となり、心にもかけなくなっている。そのため、時間への正確さについては私たちもしっかり日本に学ぶべきだと思う。

三つめは、日本人はとても礼儀正しい。「ありがとうございます」という言葉はしょっちゅう耳にすることができる。身分や地位の違いなど関係なく、皆が礼儀を以って他人と接している。店員のサービスマナーも素晴らしく、親切で細やか、そして丁寧で気配りが行き届いている。これらは私たちがしっかり日本に学ぶべきものである。私たちは「礼儀の国」を自称しており、失われた礼は野に求めなければならないのである。

大学名： 清華大学

氏 名： 韓儲銀

テーマ： 1.国民性についての理解

4.日中間の交流

日本での8日間において、私は一連の活動を通じて日本の様々な面について知ることができた。ここでは、日本の人々が他国の優れた物事を学ぶことに長けていることと、日中の交流は未だ不足しているという二つの点について述べていく。

ホームステイの際、私は日本の中学校の教科書において『桃花源記』、『史記』、『論語』、『紅樓夢』等の古詩や文章、ことわざなど中国の伝統文化について沢山掲載されていることに気が付いた。ホストマザーは、「私たち一家はとても中国の文化が好きで、中国の文化には素晴らしいものが非常に多く、私たちはそれを吸収し自分のものとしていかなければならない。そうしてこそ私たちはより良く成長できる。」と述べていた。以前から日本人は学ぶことに長けているという話を聞いたことがあるが、今回の経験はやはり驚くべきものであった。他国の優れた点を学び自分を高める、こうした意識は日本人の深層心理にあるものなのかもしれない。これは素晴らしい力であると同時に恐るべき力である。日本民族の生命力の強さは、学ぶことに長けているという国民性と切り離す事ができないものである。

しかしながら、日本の一般市民の中国への理解は未だ不足している。ホストマザーは25年前に北京を訪れたことがあり、彼女から北京の街では今でも沢山の自転車が走り、人々は薄暗い色合いの洋服を着て出かけているのかと聞かれ、私が北京は今では国際的な大都市で、毎日1000万人以上が地下鉄を利用していると話したところ、とても驚いていた。大使館での汪参事官からの日中関係についての紹介では、中国を訪れる日本人は毎年200万人以上いるが、大多数が仕事の関係での訪中であり、真に中国を知り、中国人と交流を持とうとする日本人はとても少ないとのことであった。交流が少ない現状から、多くの日本人の中国への印象は、20世紀ひいては第二次世界大戦当時のものに止まっている。そのため、日中両国の交流を強化することは非常に重要である。今回私たちは日本を訪れたが、日本の優れた部分を学ぶ以外に、私たちは日本人の人々に中国の現状を紹介し、中国の声を伝え、中国の在り方を示さなければならない。これこそが今回の訪日における最も大きな意義である。

大学名： 清華大学

氏 名： 鐘玲

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

ここでは日本のマナーや思いやりについて語ってみたい。まずマナーについて私は、日本とはとてもマナーを重視する国だと思った。友人であれ、またはホテルのサービススタッフであれ、顔を合わせる度に会釈や挨拶をする。これには私たちも、中国に戻って以降学校の宿舎で警備員を見かけたら、会釈をしてさらに「おはよう」と声をかけるようになるかもしれないと冗談を言い合った。食事の前には「いただきます」と言うことで料理に携わった方々への感謝を示し、お酒をすすめる際は、自分でお酒を持ち、相手にお酒を注いでから乾杯する、これらは中国とは多少異なるものである。茶道においてはよりマナーを重視しており、茶菓子を食べてから茶を飲む、茶碗が置かれる際は茶碗の柄のきれいな面がこちら側を向いており、茶を飲む際はきれいな柄を相手側に向ける、飲み終える際には吸い切りの音を出すことで美味しかったことを知らせる、飲み終えたら茶碗を拭く、これらのマナーから日本人のマナーへの重視度合が見て取れる。

それから思いやりの面について私は、彼らはいつも私たちが食べられないもの、苦手なものを気に掛け、マンゴーへのアレルギーのある学生へ別のものを準備するなど、とても他人を気遣い、またとても友好的で親切だと思った。私のホストファミリーは私を連れて出かける際、常に私の行きたい場所などの意見を聞いてくれた他、私に付き添って街を散策したり、私の食べたい料理を作ってくれたり、食材の買い出しの際は私の食べたいものを聞いてくれて、さらには私の誕生日のお祝いまでしてくれた。彼らは本当にとても私の意向を尊重してくれた。

私は、日本には沢山の中国とは異なるマナーがあり、彼らはそれらのマナーを厳しく守っていると感じた。そして日本人はとても友好的で、他人を思いやり、他人の意向を尊重すると感じた。

大学名： 清華大学

氏 名： 連鵬龍

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

今回の8日間の訪問と交流を通じて、私は日本について新たな認識と理解を得ることができた。

総じて言えば、私の日本への感覚は「それぞれがそれぞれの道を行く」である。人と人、人と自然のいずれもそうである。「それぞれがそれぞれの道を行く」、これは決して互いを隔絶するわけではなく、逆に、常に他人やその他の物について考え、それらへの利便性をもたらすことで全てを調和させている。日本人は万物にはいずれも神が存在していると信じている。そのため彼らは自然を尊重また保護し、人と自然の調和を実現している。

当然、若い世代の日本人もそうした「それぞれがそれぞれの道を行く」の民族的特性の影響を多少なりとも受けており、他人との間にはマナーはあるが、情といったものについては多少欠けている。だがいずれにしても、こうした「それぞれがそれぞれの道を行く」の特性によって日本の社会はとても調和がとれている。

この他、日本人の集団帰属意識について私はとても感心している。彼らは複数の会社から一つの商社を構成し、提携と競争を通じて共に発展をしている。また彼らは世界を視野に入れ、広い心で全人類の生存や発展に関わる命題に取り組んでおり、何代も事業を継続し、何十年ひいては何百年の歴史を持つ企業をいくつも創っているのである。

日本人のマナーや思いやりにはとても感心させられた。よくよく考えると、これは正に私たちの古代文化において提唱されていた品性ではなかっただろうか？しかしながら、日本人はこの面で私たちよりも優秀である。法律に定められてはいないものの、日本人は自発的にエスカレーターでは片側に立ち、急いでいる人のために道を空けている。

今回の8日間の訪問で、私は日本について新たな認識が得られた。日中間の交流や提携が今後さらに増えていくことを願っている。また私自身も将来日中友好提携に何らかの貢献ができることを願っている。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 姜雨荷

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

「皆にはそれぞれ帰る場所がある」、これは8日間の日本での生活を通じた私の感想で、日本ではぬくもりや帰属感というものを感ずることができた。

「従業員は家族で、会社は家である」、いくつかの企業を見学したが、各企業の理念には「従業員を思いやり、人材を重視する」といった意味合いが込められていた。また同時に私たちが実際に会った各企業の従業員もまた彼らの笑顔や仕事への情熱を通じて、彼ら自身もまた仕事を重要なものとして捉え、同じ目標または社会そして理想のために、また昇進やお金のためだけでなく、自分自身そして企業という「家族」のために奮闘している。

「自分の学校が提供する舞台で自由に能力を発揮する」、これは日本の大学及び大学生についての私の印象である。或いは京都大学や一橋大学の学生数が比較的少ないため学校側も学生に対しての方向性を持った管理がしやすいという面も有るかもしれないが、私たちが交流をした際、大部分の日本の学生は学校のリソースを利用し自身を高めていることを知った。図書館、海外交流、科学研究など、学校側は学生のために大きな舞台を構築し、学生らはそれらをうまく活用している。反対に中国国内の状況について私は、大部分の人が学校の入学通知を受け取った後、学校のリソースを活用せず、教育資源を無駄にしていると感じている。そのため、私たちは日本の学生に学び、口より手を動かし、将来へのプラン設定をしっかり行い、学校や身の回りの教師そして学生と良い関係を構築していく必要がある。

最後に、この文の初めの一言について改めて説明をしたいと思う。「皆にはそれぞれ帰る場所がある」というのは、一種の精神的な帰属感のことで、自分の情熱を傾けることができる場所、つまり仕事や学習またはその他の趣味、ひいては例えば他人に優しい、細かいことに拘らないといった一種の生活態度のことをいう。そしてそれらの情熱を持ち、追求をしている。これがこの数日間において日本の大部分の人から受けた印象である。

そして個人的には、今回の旅における最大の意義は、自分自身が学習や学習環境そして専攻の意義というものを見直すことができたことにあると思う。成績や順位とは関係なく、最も重要なのは自分を高め充実させることであり、自分の今後数十年の生活のための投資をすることである。順位は他人との比較だが、しっかり学べたかどうかは自分自身の問題である。だからこそ学習は自分にとって何よりも重要で、急を要するものである。

先生方や仲間の皆にはとても感謝している。今回皆で有意義な8日間を過ごすことができた。今回の収穫を自分の力として、再会の時には最高の自分でいられることを願っている。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 陳子鑫

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

ここでは主に日本人のマナーと思いやり、そしてその表現方法について語ってみたい。まず日本人のマナーの良さは有名で、人と人が会う際は決まって挨拶やお辞儀をする。ひいては見知らぬ人同士目が合った場合でも、互いに笑顔で挨拶をする。また彼らは言葉におけるマナーを重視する。こんにちは、ありがとう、さようなら等は毎回のお辞儀の際に使う言葉である。彼らとの交流では、おのずと自分が尊重そして重視されているという感覚が生まれる。

私は、日本人のマナーは彼らが他人の気持ちを重視していて、自分の真心を全力で相手に伝えようとしていることから来ているのだと思う。実際に彼らの茶道がその点を最もよく表しており、主人が茶碗の最もきれいな部分を客に向ける動作は、客への重視と尊重を示している。そして客が茶碗を180度回す動作、茶を吸い切る音、そして自分の口を付けた部分を拭き取るといった動作もまた主人への尊重を示している。こうして私たちが知る日本人のマナーが形成されている。そうしたマナーの多くは動作と言葉が共存している。

日本人の生活においては、他人の気持ちをとても重視する。公共スペースでは大声で話をする人はほとんどいなく、小声で話をする人も少ない。公共施設ではほぼ全ての人の需要を現実のものとしており、各人が必要な機能を見つけることができる。レストランやホテルといったサービス業では客の評価が最も重要な要素で、彼らのサービスを受けたことがあれば、あらゆる面で行き届いていることが分かる。

他人の思いに配慮することはすでに日本人の習慣になっており、私はこれもまた人間の品性の表れだと思う。孔子が言った「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」の言葉も同様である。そして日本ではすでに他人の思いにまでも配慮し、しかもほぼすべての人がそれを実行できている。これには本当に頭の下がる思いである。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 李雅嫻

テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

日本のソフトパワーは誰もが認めるところである。アニメを例にとると、日本のアニメ産業は一つの完全な産業チェーンを構築しており、様々なノベルから漫画、そしてアニメひいては様々な関連グッズまで完全に整備されており、規模も非常に大きく発展している。

秋葉原は有名な二次元商品の聖地であり、沢山のアニメリソースや体験ショップ、グッズショップにより、特に購買力のある若い世代を引き付けそして経済の発展を牽引している。また同時にアニメは輸出文化として様々な角度から自国の文化を発信している。例えば、漫画などでしばしば登場する神社や茶道、和服といったシンボリックな文化については、作品の中で生き生きと描写されており、文化大使の役割を果たしている。

またアニメだけではなく、日本は文化の継承についても素晴らしいものがあり、元来中国から伝わった茶道や座禅、建築等の文化はいずれも今日まで確実に継承されており、冷遇されることはない。それに比べて中国は5000年の文化や歴史など途切れることなく続いてはいるが、現代においては茶芸や刺繍、漢服、伝統音楽といったものは次第に冷遇され、多くの無形文化遺産は継承者がいないという難題を抱えている。例えば伝統的な舞台芸術を例にすると、国粹である京劇については授業で取り上げることは増えつつあるが、影絵芝居や樂亭太鼓といった私の出身地である唐山地域を代表する芸術については、現在ではほとんど目にすることはない。

こうした芸術についてはその存在を守る以外に、さらに積極的に革新をして新たな形で発展させる、または新たな表現形式を追求することで私たちの文化を継承し、真の文化継承と文化輸出を実現する必要がある。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 秦宇

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

今回のスケジュールにおいて最も収穫があり、また印象的だったのは日本の伝統文化の継承とそうした文化の国民一人ひとりにおける内在化であった。日本では伝統文化は国を構成する重要な要素であり、政府が大いにPRをしている。また文化や古跡などの保護に資金を投じており、日本の国民は伝統文化をとっても尊重し、自発的に継承そして発揚をしている。日本の街中では和服姿の人をあちこちで見かけ、しかも人混みの中でも全く違和感がなく、日本人にとっては当たり前前の光景となっている。中国から伝わった茶道もまた、日本の人々はしっかりと継承し、マナーを以って古代からの伝統を学んでいる。こうした環境の下、日本の伝統文化は日本の国民一人ひとりに浸透し、自分たち自身のものとして、また国民性として、国民一人ひとりに良い影響をもたらす文化となっている。正に汪参事官の言葉にあったように、こうした文化の内在化は日本の国民に温和、親切、マナーの良さといった特徴をもたらし、全体的な国民の素養をさらに高めたと言える。

この点については、中国はまだ多くを学ぶ必要があると思う。たとえ経済が急速に発展しても、文化や精神面の発展が遅れてはならず、物質と精神が共に発展してこそ、中国は真に強い国になることができると思う。

大学名： 中国人民大学

氏名： 呉成庚

テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「夷の長所を以て夷を制す」、これは近代の先達が当時の国民を啓発した理念であるが、今日では「夷の長所を以て共に進歩を促進する」必要があり、中国が歩むべき道となっている。

日本訪問期間中は日本企業の視野の広さと将来への方向性の素晴らしさを感じた。利益を確保した上で、全人類、全社会に目を向ける理念は学ぶべきものだと思った。そうした中私は、いくつかの事について将来中国で大きく発展するのではないかと感じた。

一つめは介護産業である。訪日期间中、交流過程や街中、地下鉄、ホームステイまたは温泉など様々な場所において高齢者の姿を見かけた。日本では高齢者の生活はとても充実していて、高齢者向けの製品なども存在している。今回の訪問では介護産業に関わることはなかったが、高齢者比率が日増しに高まる中国では、将来的に大きな発展が見込まれる産業だと感じた。

二つめは病院の運営管理レベルの向上である。日立の見学の際、同社が病院運営改善シミュレーションシステムにより病院のサービス・運営効率改善をしているのを目にした。ここ数年、中国の病院では問題が続出し、政府が急ピッチで改革を進めている背景の下、病院の運営管理レベルの向上は医療体制改革と一体となるべきもので、関連のコンピューターやビッグデータ技術への需要も拡大していくことが見込まれると感じた。

この他、ハイブリッド自動車の開発生産、ホテル等の商業施設運営におけるエネルギー管理技術などへの需要も中国では今後拡大していくと思われる。

外国の進んだ理念の学習を通じて、技術を発展させ、社会全体の発展を推進する。これが中国がより豊かで強い国となり、大国の責任を果たしていくための道である。

大学名： 对外経済貿易大学

氏名： 閔一萱

テーマ：1.国民性についての理解
3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

ホームステイは私の今回の日本訪問において最も忘れ難い体験であった。訪日前から宇田川さんは私の行きたい場所や食べたいものなどをリサーチしてくれて、さらに天気の状態まで考慮に入れた上でとても細かなスケジュールを作ってくれた。そして宇田川さん一家と共に神楽坂、お台場、井の頭公園そして吉祥寺の商店街などに行った。皆さんとても親切であった。実のところ私は多少人見知りなので、初対面の際は緊張で私の日本語もとても拙かったが、神楽坂で不二家の抹茶味の鯛焼きを買ってもらった際に宇田川さんの娘さん(enaさん)の笑顔を見た瞬間、それまでであった緊張感が綺麗になくなった。宇田川さん一家は閑静な住宅街に住んでいて、近くには小学校や小さな商店がある。また広くてきれいなバス、坂が連なる小さな道、生い茂る草花、そして子供を連れて散歩する沢山の家族の姿を見かけた。お台場海浜公園の夜景はとても壮観で、自由の女神像やレインボーブリッジそして東京湾が織りなす景色、吹き付ける海風、泳ぐクラゲの姿が見えるほど透き通った水などが印象深かった。そして井の頭公園の景色はとてもきれいで、多くのミュージシャンが演奏をしていた。また吉祥寺の賑やかな商店街、多くの人でごった返す書店、行列が途切れることのないお店などを見かけた。また宇田川さんの二人の娘さんはとても可愛かった。そして宇田川さんの奥さんは韓国人であり、その日の夜は日本という異国での生活について奥さんと沢山おしゃべりをし、日本在住の外国人の視点から日本という国を知ることができた。

日本は本当に優しい国で優しい心を持っていると思った。私は訪日団の仲間と自由時間を利用して居酒屋に行ったが、その際お店の人は私たちが中国人だと知って、話すスピードを緩めてくれ、またその笑顔はとても優しくかった。その他住宅街にある古い歴史を感じさせる駄菓子屋、そして道を走る自動車が常に歩行者を優先していることなどが印象深かった。

人間性というものには本当にしっかり考えるべき問題である。日本の国民性にある他人に迷惑をかけない、穏やかに物事を行うといった部分にはとても魅力を感じた。

大学名：対外経済貿易大学
氏名：李黛雅

テーマ：3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

今回の日本での旅において最も名残惜しいのはホストファミリーの皆さんである。彼らとの一泊二日の交流を通じて日本人の細やかさと優しさをより深く感じる事ができた。

ホストファミリーのお母さんは優しく可愛らしい人だった。食事の際は笑顔で無理をしなくていいから、食べきれなかったら残しても大丈夫だからと声をかけてくれた。ショッピングの際はお店の商品の美しさを心から褒め、おしゃべりの際は、私が日本語の組立ができずどう話していいかわからない時でも私が話すのを待ってくれて、さらに慌てずゆっくり考えてと言ってくれた。ホームステイの二日目では前の日は良く休めたかどうか、食事は口に合ったかどうかを何度も気にしてくれていた。そして陽射しが強かったため事前に私のために外出用の帽子まで準備してくれていた。

ホストファミリーのお父さんもまた優しくとても親身にしてくれた。私が行きたい場所や食べたいものなどについて、私が日本に来る前からメールで確認をしてくれた。そして私が東京の観光スポットに詳しくなかったので、観光スポットの紹介HPなども送ってくれた。またスカイツリーを予約し、私に展望台からの東京一帯の景色を見せてくれて、色々と説明をしてくれた。夕食後のおしゃべりでは日本語を上達させるための方法など沢山のことを教えてくれて、とても参

考になった。

娘さんもまたとても明るく、私は本当に彼女のことが気に入った。年齢こそ私より若いですが、色々と私の世話をしてくれた。おしゃべりの際は、私が聞き取りやすいように話すスピードを緩め、身振り手振りを使って説明してくれた。二日目は部活の関係で一緒に遊ぶことはできなかったが、それでもわざわざホテルまで私を見送りに来て、さらに手紙までくれた。私は本当に彼女のことが好きである。

それからおじいさんはとてもユーモアがあり、また細やかな気遣いをしてくれた。おじいさんとのおしゃべりではいつも笑い声が絶えなかった。またおじいさんからもらった草加せんべいはとても美味しく、また桜の風景写真はとても綺麗であった。

彼らとの交流では、彼らの心からのおもてなしや思いやりにとっても感動させられた。今後彼らを中国に招待し、同様に中国人の優しさを感じてもらえる機会があることを願っている。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：林子恵

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本での約1週間の旅では沢山の収穫が得られた。その中でも印象深かったものは二つある。

一つめは日本人のマナーである。どんな時でも日本人に出会うと、彼らはとても穏やかな声で話をする。またエレベーターに乗る際は一言「すみません」と言う。ホテルやコンビニの従業員などはいつも笑顔で客からの様々な要望に対応している。この点は中国と比べると大きな違いである。またホームステイの舞台は住宅街であったが、至るところに趣のある白い家があり、その様子はとても可愛らしかった。また午後庭でバーベキューをしている時、隣の家の人が出かけるのを見かけるとすぐに挨拶をし、さらにできたての肉を先に相手に渡していた。ホストマザーが言うには、近所同士の関係はとても良く、何かある際は互いに助け合っているとのことであった。

二つめは日本の衛生面である。この点については初日に飛行機を降りてすぐに感じる事ができた。道路にはごみ一つ落ちてなく、至るところがきれいであった。ホテルのトイレも驚くほどのきれいさで実家のトイレと変わりなかった。地面や便器など汚れが全くなく、頻りに清掃をしているのが分かった。また日本の道路を走る車は車輪が輝いていた。先生の話によると、日本のドライバーは時間があると車内で寝るのではなく、車を磨いていて、こうしたメンテナンスも重視しているとのことである。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：陳卓

テーマ：1.国民性についての理解

「秋近き心の寄るや四畳半」

これは日本の著名な俳人である松尾芭蕉の句で、夫婦の感情を描いたものである。四畳半というのは夫婦が生活を共にする居間のことで、ここの机といす、絵や屏風はいずれも二人の生活の証しで、深い思いが満たされたものであり、夫婦二人の愛情が続いていく様を想像することができる。

なんと細やかな感情であろうか、これこそ穏やかな日本人の姿である。

私が実際に見た日本人もまた穏やかで優しくかった。

優しい車、小さな家、狭い街、笑う人、会釈、譲る道、きれいな地面そして空気などもまた清々しかった。

私にはあたかも柔らかな日本の心が脈々と流れているのが聞こえたかのようであった。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：張元浩

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

今回の走近日企の活動への参加を通じて、私は日本についてこれまで以上にはっきりとした理解や認識を得ることができた他、日本への印象もこれまで以上に良くなった。個人的には社会の二大主体である市民と企業について印象深いものがあつた。

初めに市民についてだが、私の体験から言うと日本人はとてもマナーが行き届いた民族である。いつでも礼儀正しくあることはとても難しいことであり、こうしたマナーへの重視が社会全体に一種の調和をもたらしている。そのため、人と人とのいざこざも比較的少ない。また日本人は相手を思いやる能力がとても優れていて、日本人と一緒にいると不快に感じることはなく、春の風を浴びるかのように爽やかな気持ちになる。こうした思いやりというものは私たちが学ぶべきものである。

次に企業についてだが、日本には沢山の長い歴史のある企業が存在しているが、その理由は彼らの先進的な理念にあると思う。日立的「Inspire the Next」のスローガンは特に印象深いものがあつた。こうした未来に向けて革新を続ける理念はとても意義深いものがある。この他、日本企業の社会的責任感もとても強く、オムロン京都太陽であれ、または三菱商事の震災後の復興への貢献であれいずれも重要なものである。社会には企業の責任感が必要であり、一つの形にこだわらず様々な形式の福祉を展開し、政策と企業の福祉が組み合わさって完全な社会福祉が構築されてこそ、より良い社会になっていくと思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：艾倍兆

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

私たちは8日間の日本での旅において企業への訪問や大学での交流、そして文化体験などを通じ様々な角度から日本を感じ、日本を知ることができた。初めて日本を訪れた私の日本への第一印象は、親しみやすい国であつた。道路はとてもきれいで、住宅の外観もとても素晴らしく、人々は皆礼儀正しく、コンビニの店員から企業や大学の役員までいずれも謙虚な印象を受けた。「お待たせしました」や「ありがとうございます」といった一言や会釈といったわずかなことからまた忘れ難い素晴らしさを感じることができた。中国にはこうした礼儀がないわけではなく、またこうした教育も欠けているわけではないが、人々は感謝やお詫びといった言葉または動作をすることが少なく、どちらかと言うと自分より年長で地位の高い人への尊敬を示す傾向にある。私個人について言えば、日頃から学校の食堂などで食堂の従業員に「ありがとうございます」と言っているが、周りではそうした人はさほど多くない。そのため、時折従業員が私の感謝の言葉を聞いて驚いたあとで嬉しそうに「どういたしまして」と返事をするのを聞くと、私の心は複雑な気持ちにな

る。彼らが驚くのは私たち学生が普段感謝の気持ちを表すという意識に欠けていることを意味していて、ひいては彼らの長年の労働について考えることなく、お金を払っているのだからサービスを受けて当然というような浅はかな考えを持っているからだと思う。いつになったら私たちの社会が年齢や地位といった制限のない礼儀を身に着け、他人を思いやり、また他人による自分へのサービスなどを当たり前のものとしなくなるのだろうか。

一連の訪問を終えた私の日本への二つめの印象は「科学技術によるイノベーションを追求する社会」である。日立の研究所での見学において私たちは人へのサポートやより良い生活を創造するために作られた、人工知能による話者識別翻訳システム等のイノベーション製品を沢山見かけた。未来の中国は世界においてより活発に重要な役割を果たしていき、これまで以上に多くの国際的プロジェクトが展開されるであろう。そのためこうした複数言語の識別翻訳のシステムは国際交流において広く利用されるであろう。次にホテルニューオータニにおける資源の循環利用技術も中国において広く普及されるべきであり、日増しに増加する人々の資源需要と資源自体の有限性ととの矛盾を緩和することで、より環境に優しい生活状態を実現していく必要がある。

大学名：北京外国語大学

氏名：秦諾雅

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

中国では日本人のマナーの良さについて色々と耳にするが、今回日本を訪れて私自身そうした認識への理解を深めることができた。まずレストランではスタッフが常に笑顔で「いらっしゃいませ」や「ありがとうございます」といった言葉を何度も口にしていて、また40過ぎの中年の男性スタッフや女性スタッフが私たち大学生に対しても会釈をし、敬意を示していた。ホテルに到着した際は私たち一行30数名の一人ひとりに対してスタッフから歓迎の言葉があった。そしてこの8日間路上で慣れることのなかった事と言えば、車が歩行者に道を譲る事であった。前方に道を横断しようとする人がいる場合、全ての車が止まり歩行者に道を譲るのである。エレベーターに乗る際は互いに見知らぬ関係であっても会釈をし、挨拶をする。こうした様々なやさやかな行為は、これまで外国に来たことのない私にとっては想像がつかないものであった。今回日本を訪れ日本のこうした文化を間近で感じる事ができたことは、自分にとっては意義深いことであった。中華民族の伝統文化にもこうした精神は存在しているが、時間の経過により、また私たちは生活に追われ、こうした精神を忘れてしまっている。私たちは日本の優れた部分に学び、さらには私たちの伝統を復活させ、継承していく必要がある。

次に日中間の交流について見てみる。今回私たちは2日間のホームステイを体験した。私のホストファミリーは今回初めてこうした活動に参加したとのことで、彼らとの交流の際には、ホストファザーが中国に出張で行く以外に他の人は中国に行ったことがなく、彼らの中国への印象はいずれもマスコミの報道によるものであることが分かった。しかしマスコミの中国への報道は誇張されているか事実とは違う場合が多く、彼らの中国への間違った認識に繋がっている。また他の団員の話によると、彼らのホストファミリーは中国に自動車が出走っていることや高速鉄道の存在があることに信じられない様子であったとのことであった。それと同様に私たち大部分の中国人の日本への印象や理解もマスコミの報道と密接に関連している。そのためこの点が両国の国民に誤解が生まれる原因となっている。相手の国に赴き、自分の行動で彼らに真実の中国の姿を知らせることは、日中両国関係の友好的な発展を促進する効果があると思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：郝琦璘

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の訪日では沢山の素晴らしい印象深い思い出が残った。日本の環境は素晴らしく、サービスの態度も良く、多くの優れた文化をさらに高めている礼儀の国であることはかねてより聞いていた。そして今回実際に日本を訪れ、まさに評判通りだと感じた。スモッグの都市である北京を離れ、飛行機は関西国際空港に着陸した。きれいな空気、空にきらめく星々、そしてサービススタッフによる細やかなサービス、これらいずれも私の期待をさらに膨らませるものとなった。日本の道路はとてきれいで、塵一つないほど清潔といった感覚である。そして日本のタクシーはどれも車体がきれいに磨かれている。タクシードライバーは時間を見つけては車を磨き、タイヤすらもきれいにしている。そして彼らは紳士的な制服を身に纏い、とても礼儀正しい。タイヤまできれいにする必要はあるのか、毎回お客を下した後車を磨く必要はあるのかとってしまうが、よくよく考えると、これは日本人の「こだわり」の表れではなく、すでに何世代にもわたって積み上げられた浸透している習慣なのだと感じた。私のホストファミリーについてもそうしたことが言え、ホストマザーは家の中をとてきれいにしておき、装飾品もとても美しく、部屋全体があたたかさ上品さに満ちていた。そして毎朝部屋の掃除から一日が始まる。中国には「家の掃除ができない者は、どうして天下の掃除ができるのか」という言葉があり、私は日本人とは正にこの言葉を実践しているのだと思った。家庭という小さな単位から始まり国全体まで、各人が自発的にこうした行いをする中で、自然と驚くべき効果が示され、こうした些細な部分を重視する秩序立った態度は次第に日本人の国民性となり名高いものとなったのである。「逆に」と言うよりかはそれぞれの良さがあると言ったほうが良いかもしれないが、北京のタクシードライバーを例にすると、彼らの制服は情熱の黄色で、車内では楽しく乗客とおしゃべりをする。時には環境や渋滞のことなどについて愚痴をこぼしたりもするが、ほとんどが優しく親切である。私は日中両国のこのような比較的明確な違いは、両国の異なる文化や環境の影響によるものだと思う。優劣をつけることはできないが、相手側の手法から良い部分を汲み取ることはできると思う。実際に日本のきれいさに比べると、私たちはまだまだ成長できるはずであるが、私たちはこれまですでに大きな進歩を遂げている。また日本では多くの公共スペースにおいて自動設備が整っていて、人々が有意義に活用することができる。そのため自然と公共施設を保護し他人の利便性を考慮する考えが生まれ、日本の公共スペースは安定した運営がされている。こうした点は中国も学ぶべきだと思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：徐杭

テーマ：4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の活動は絶えず交流を続けた旅であった。日中関係が前進あるのみという今日にあり、日本のマスコミによる故意の曲解報道や歴史問題に関する中国の民族感情から、インターネットメディアだけをあてにした交流では不十分であり、小範囲の面と向かった交流がより効果的であると考えられる。

一橋大学では両国の大学生の就職活動について討論を行った。そしてこうした討論を通じて私たちは、日本の大学生は事前に卒業論文を完成させ、三年生からは就職活動を始め、様々な実習を通じて経験を積み、自分に適した

企業を見つけ、一連のテストや面接により「内定」を獲得して就職活動が終了するということを知った。彼らはまたタイムラインでそのプロセスを示してくれた。それと比べて中国の大学生の就職活動の時間は固定されておらず、はっきりとタイムラインで示すことは不可能である。だがそうした中でも、交流を通じて私たちは、両国の大学生の仕事の探し方や経歴を充実させる方法、及び仕事や企業の選択基準などについてはとても似ていることに気が付いた。私たちは正に「相違点」から一部の「共通点」を見つけ、さらにより具体的な「相違点」を見つけることができた。そしてこうした「相違点」について討論をすることで相手の国への理解がより深まる。これが私の交流というものについての理解である。

そして日立製作所中央研究所の見学では、同社の静脈認証技術について知ることができた。インターネットが日々発達する今日、安全問題は終始大きなリスクとなっており、特に中国では電子決済サービスが大きく発展している中、ユーザーのプライバシーや財産の安全は十分に重視されるべき問題である。現行の顔・指紋認証と比べ、静脈認証は本人のみがロック解除が可能のため、より安全であり、この技術は今後幅広く応用されていくであろう。そして人工知能による言語認証と転換技術においては、最終的に二つの異なる言語を話す人のスムーズな意思疎通を実現する。この技術もまた中国で大きく活用されるべきものである。中国の世界市場における役割が今後ますます大きくなり、加えて「一帯一路」等の国際プロジェクトの展開により、中国と密接な関わりを持つ国は増えていき、民間交流にとっても、関連言語の翻訳者を一人育てるのには時間的・経済的なコストがとても高いため、この技術は外国語人材への需要を大きく緩和するものである。

以上が日中交流及び新たな技術の面における私の拙い意見である。だが私は今後の学習を通じて自分の認識を広めることで、真に国際的視野を持つ人間になれると確信している。

大学名：北京外国語大学

氏名：何雨婷

テーマ：4.日中間の交流

日中間の交流は政府間の交流のみならず、それよりさらに頻繁に行われているのは民間交流である。

今回の訪日活動において、私たちは一橋大学の学生と交流そして討論を行った。この時のグループ討論は日本語グループと英語グループに分かれて行われた。これは民間交流における有利な要素の一つである共通の言語によるものである。相手の話す内容を理解することができてこそ交流が実現できるのである。また交流を深めるには、相手を受け入れるまたは良い点を吸収するという態度が必要である。一橋大学の学生との交流では、皆はテーマについて事前に準備をしておき、討論の際は話の筋道もはっきりとしていた。日中双方の相違点の比較の際、私たちは実際の中国の状況をありのままに紹介し、日本の学生からも多くの意見が出され、より様々な角度からの思考が可能になった。今回の討論会で最も印象深かったのは、情報の記録と発信における筋道である。筋道をつくるには情報を集約する能力が求められる。例えば一橋大学の学生はタイムラインを使い日本の大学生の就職活動状況を説明した。これは口で説明するよりも直観的である。今回のような大学生の交流活動もまた民間交流の一部分であり、また非常に効果のあるものである。こうした交流自体は非常に得難いものではあるが、人に与えるインパクトは通常の旅行などに比べてより大きいものである。

日中両国は一衣帯水の隣国であり、深い歴史的つながりと幅広い共通の利益を持っている。民間交流は非常に重要であり、「民が官を促す」形式は早くから実践されている。上で述べた大学生の交流活動以外にも私たちは旅行での交流や貿易での交流等を行っている。今回の訪日活動において見学した日本の大企業もまた中国と何らかの提携や交流を行っている。この他インターネットによる交流も若者の間で流行している。科学技術の発展により、私たちはインターネット上でより多くの気が合う友人を見つけることができるようになり、その中には多くの外国の友人も存在して

いる。こうした民間交流の方式はより手軽で、時間や労力が節約できる他資源の節約にも繋がっている。

日中両国間における友好は両者にとっても利益となり、争いは両者が被害を受けることになる。私たちは現有の資源を活用し交流や提携を行うことで両国関係の友好促進への努力をしていく必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏名：李美婷

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本について取り上げる際、日本についての知識がない人は必ず日本民族は粗暴で冷酷だと言う。これは日本の侵略戦争がもたらしたマイナスイメージによるものである。私は日本語を学んでいることから日本の文化についてはある程度知っている。日本人はマナーを重んじる一方、他人に親切で、その思いやりには感心するほどである。オムロン京都太陽の工場では身体にハンデを持つ従業員の方々が早くから私たちを出迎え、会議室では水やペン、そして資料やイヤホン等必要なものがすべて準備されていた。そしてお別れの際もまた皆さんが私たちの車が視界から消えるまで見送ってくれた。日立製作所中央研究所、三井住友銀行、三菱商事、ホテルニューオータニそして交流をした二つの大学ではどこでも、スタッフが私たち皆に会釈や挨拶をし、見送りの際も同様に礼儀正しかった。日本人とはこれほどまでに親切でマナーを重んじる民族であることを私はこの時初めて知った。他人への思いやりという点については、ホームステイの2日間で最も強く感じる事ができた。ホストファミリーとの外出ではいつでもどこでも私は彼らの間の位置であった。ホストファザーが前で案内し、ホストマザーが私の後ろを歩いていた。時にホストマザーが道を案内したが、その時は私のはぐれないように彼女が5秒おきくらいに私の方を振り返っていた。こうした日本人の他人への思いやりはとても貴いものだと思った。食事の際も同様で、私が食べ始めてから皆も食事を始めた。こうした事もまた日本人のマナーである。夜におしゃべりをしていた際家族から電話があり、影山さんは私に気にしないでと伝え、私は隣の部屋で電話に出た。そして寝る前には歯ブラシやパジャマなどを持っているかを聞かれ、さらには冷蔵庫の中にあるものやWIFIのパスワードなど、あらゆることを教えてくれた。次の日には良く休めたかや、外出時にはたくさん歩いて疲れてないか、熱くないかなどを聞いてくれて、また日陰を歩くと涼しいと教えてくれた。こうした細やかな心配り、そして心温まる挨拶の中にも私自身のプライベートな空間も提供してくれる、これが、私が今回触れ合った日本人である。

お別れは名残惜しいものがある。日本の人々はホテルのゲートを出て私たちが彼らの視線から消えるまで見送ってくれた。他人に対して礼儀正しく素養が高い日本人は、他人に親切で、また他人を思いやっている。これらは私たちが学ぶべきものである。社会をより良くするため、私たちはこれらを周りの人に伝え、彼らを感化することで、より良い社会を構築していく必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏名：張少臻

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

今回の活動において最も印象深いことについて話をするとした場合、きっと私以外の多くの団員もホームステイを取り上げると思う。日本の人々の思いやりやマナーそして熱意といったものは団員の皆を感動させた。

先人の言葉に、礼を失った場合、野にそれを求めることができる、というのがある。

ここでいう野については、日本であると言うしかない。すでに多くの伝統文化を失った私たちに比べ、日本は中国文

化、東アジア文化におけるノアの方舟としてこれらの貴重な文化を継承し続けてきた。日本の人々のマナーの良さそして他人への思いやりに、私たちは感動すると同時に畏敬の念を覚えた。

マナーについてホームステイの初日から話をする。私のホストファミリーは他のホストファミリーよりも多少到着が遅れ、私は一人で20分ほど待った。その後彼らは繰り返し私にお詫びをした。それは遅刻に対してのお詫びではなく、私を不安な気持ちにさせたことへのお詫びであった。90度のお辞儀についてはかねてより話には聞いていたが、やはりその様子には驚かされた。それからホストファミリーのお宅に到着した時とお宅を離れる時には、家族全員が出てきて挨拶またはお別れをしてくれ、しきりにお辞儀をしていた。これは初めての体験であり、現在の中国人にとっては面倒に感じるかもしれないが、こうしたマナーは双方を尊重するもので、互いを認め合うものである。

他人への思いやりについてはさらに驚かされた。ホストファミリーは私が帰国する際のお土産のことを考え、貴重な日本酒をくれた以外にも、さらに安くても良い品を色々教えてくれた。化粧品を買う際、とある商品が人気で売り切れだったが、彼らはドラッグストア、コンビニ、デパート、化粧品専門店など手分けして探してくれた。最初の店になかった際は買うのを諦めようとしたが、彼らは私や私の友人をがっかりさせたくないと言ってあちこち探してくれた。

この他面白かったのは、ホームステイの2日間での外出においては、一部のルートにおいて徒歩、自転車、バイク、自動車、タクシー、地下鉄、電車といった手段で移動できたことで、日本の様々な交通手段を体験できたことにとっても感謝している。

ホストファミリーは私にこれまで感じたことのない温もりを与えてくれた。経済が急速に発展する中、私たちは失った中国のマナーというものと改めて向き合う必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏名：汪佳偉

テーマ：4.日中間の交流

今回参加した「走近日企」の活動において最も大きな収穫があったのはホームステイでの2日間であった。

この2日間では面白かった事や感動した事など沢山あったが、その中でも印象深かったのはホストファミリーとの交流であった。鎌倉へ行く途中、「紳士服」の看板を見かけた私は、中国にも「紳士」という言葉があるが、現在若者の間では紳士という言葉について意味合いが変わっていると話したところ、彼らはとても驚いていた。その後私たちはさらに、日中両国に存在するが意味が違う言葉について語り合った。例えば日本語で言う饅頭には餡が入っている、などである。ホストファミリーの中ではホストマザーとの交流が一番多かった。彼女は外国人向けに日本語を教えているため、私は自分が日本語を学習する際に感じた問題点やより良い学習法等について意見を交換した。

お別れの際、この2日間どこが面白かったか聞かれた私は、皆さんと一緒に交流できたことが一番面白かったと答えた。交流を強化することのみ、日中両国は互いへの理解を深めることができるのである。

大学名：北京郵電大学

氏名：都平

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本がとても矛盾した民族であることは、彼らの横暴でありながらも礼儀正しい民族的性格に表れている。近代以前、日本は中国という強大な民族に対して大きな善意と穏やかな姿勢を示してきたが、近代以降中国が零落すると、日本はまたかつての師であった中国への悪意や攻撃の意志を隠そうとせず、さらには今日に至るまで中国が急速に成長している事実を認めようとしない。彼らの学ぶことに長けた性格は彼らをより優秀にしているが、弱い者いじめの性格もまた彼らの曲がった根性を示している。しかし当然ながら、私は全ての民族における国民性には二面性があると思っているが、日本の国民性におけるこうした特徴について知った上で中国が唯一採るべき方法は、中国がこれまで以上に強くなることだと思う。今日に至るまで日本の民族には一部前述の欠点も存在するが、彼らはまた「礼」の真髓を理解しており、人と付き合い物事に接する態度については完璧だと言える。最も直観的なもので言えば、私たちが企業を見学を訪れる際には従業員の皆さんが事前に迎えに出て、お別れの際には私たちの姿が視界から消えるまで手を振って見送る。太陽が照りつける暑い日でも、雨が降る寒い日でもそれは変わらなかった。これには日本側からの大きな熱意と歓迎の意思を感じることができた。

習主席の言葉にあるとおり、現在の日中関係は正念場にあり、前進あるのみといった重要な時期を迎えており、今後の動向は両国の発展において非常に重要なものとなる。新たな時代におけるアジアインフラ投資銀行や一帯一路等の構築は、日中両国の交流をこれまで以上に緊密そして重要なものとする。そしてこうした重要な時期にあつて、青年・学生の交流は両国の発展を大きく促進する役割を果たす。青年は将来の国の発展における中核となる力であり、両国の青年の日中関係への態度は将来の両国関係の行方を左右するものである。そのため、中国は自身の文化におけるソフトパワーをアピールし、日本の青年にとって魅力ある存在となることで、日本の中国への認識や理解を高めしていく必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏名：王芙蓉

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

まず私が感じた日本人のマナーの良さと思いやりについて述べたい。企業見学の際、企業側は私たちのバスが停車する場所まで迎えに出てきてくれた。そして笑顔でお辞儀をしながら「こんにちは」そして「おはようございます」と挨拶をするなど、彼らからは親しみやすさを感じることができた。その後の企業紹介の際は中国語を使い、日本語を使う際も中国語の通訳者がいて通訳を行うなどとても配慮がされていた。見学の際もスタッフが身近に付き添い説明してくれた。そして各活動においては予定の時間をしっかり守っていた。そして見学を終えお別れをする際は、スタッフがバスのある場所まで出てきて、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。ホームステイでは、どこに遊びに行きたいか、今お風呂に入るか等々、何をすることもホストファザーがまず私の意見を尊重してくれた。そして最も心が温かくなったのは、私が湖南省出身で辛い物が好きと知ったホストファザーが、次の日の朝に辛い調味料を準備してくれたことであった。こうした細やかな点から、私は日本人の行き届いたマナーや思いやりを感じることができた。

今回の活動においてももう一つ印象深かったのは日中間の交流であった。京都大学や一橋大学ではいずれも交流や懇親会の機会があった。一橋大学では「日中の就職活動」について討論を行った。日本の就活には比較的明確なタイムスケジュールがあるが、中国の場合はそれが不明確である。私たちは大学三年生、四年生の時間別、そして国別にその相違点と共通点についてまとめ、その後皆の前で討論の内容や結果の発表を行った。京都大学でもまたこのような交流を通じて日本の状況について知ることができた。討論の後には懇親会があり、ここでは日中双方の学生が食事をしながら沢山の話をした。私自身日本語を専攻していて日本に関して基本的な知識はあったので特段驚い

たということはなかったが、日本の大学生との交流では、多くの日本の学生は中国が昔のままだと考えていた。またホストファミリーも中国には興味があるが、中国の現状についてはさほど知識がなかった。こうしたことはまさに日中両国には基本的な交流が不足していることを示している。国と国の交流を促進すると同時に、日本人と中国人の直接的な交流にも配慮をすべきだと思う。

大学名：北京交通大学

氏名：趙政

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

京都大学での韓准教授との交流を通じて私は、日本人は集団帰属意識が強く、責任感があることを知った。それを中国の古い言葉で言えば「在其位、謀其政(自分の仕事を全うする)」で、集団の各人がその集団に責任を持ち、自分のすべきことを極限まで全うしている。私はこれにとっても衝撃を受けた。こうしたことの実現には非常に強い責任感と大局観が必要であり、これらは集団意識の中核とも言えるものである。

マナーの面では自分自身がとても恥ずかしくなった。日本の大学生との交流が終わった際、たまたまとある女子学生が水の入ったケースを運んでいて、見たところとても大変そうだったので運ぶのを手伝った。すると日本の学生が、私が運んでいる姿を見かけてすぐに「あなたはゲストです。これは私がやります。」と、とても上手な中国語で話しかけてきた。私は大きな衝撃を受けた。彼自身は接待側のスタッフではなかったのだが、それでも自発的に「ゲスト」である私たちの手伝いをしたのである。こうした点から、私の日本人のマナーへの印象はより強くなった。

企業のスタッフや大学生との交流においては、沢山の共通の話題や観点そして考え方を発見し、それにより交流の楽しさも増した。京都大学の学生との交流の際、とある女子学生には授業があったのだが、彼女は「皆さんとの交流は楽しくて有意義なので、ここに残って色々な話をしたい。」と言っていた。私もまた恋愛やキャリアプラン等、現代の日本の大学生のあらゆる面について知ることができとても楽しかった。私はこうした大学生同士の交流を今後さらに進めていってほしいと思う。将来は私たち若い世代にかかっており、私たちもまた互いに理解し友好を深めたいと思っている。

大学名：北京交通大学

氏名：王紫嫣

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

汪婉参事官も認めるように、日本の国民の特徴の一つは他人にとっても優しいことである。今回の活動を通じて、ホテルのスタッフであれ、またホストファミリー、日本の大学生、さらには見知らぬ他人であれ、彼らは私に最高の笑顔を見せてくれた。日本のサービス業はとても発達しており、彼らのサービスはとても行き届いていた。私はこうした親切さは彼らの国民性となっていると感じた。箱根の温泉旅館で温泉に浸かっていた際、とある物腰の柔らかそうなおばあさんが入ってきた。彼女は私たちが中国から来て日本語ができないと知った後でも、笑顔で私たちとおしゃべりをしようとしていた。私は、優しさというのはきっと日本の突出した国民性の一つなのだと思う。ホームステイの時、渡辺さん一家もまた私にとっても良くしてくれた。彼らとの交流はとても楽しく、私たちはそれぞれの国の状況について紹介し互いに

称賛があった。これらからはいずれも日本人の親近感が感じられた。

それ以外にも、日本人はマナーを非常に重視していた。私は席を離れる際には椅子を元の場所に戻す、食事の際は残さず食べる、遅刻をしないといった様々なマナーや習慣というものを今回学んだ。一部のものについてはこれまで気に掛けることがなく、一部のものについては中国にそういった習慣がなかった。しかしこれらは私にとってとても印象深いものであった。私はまた京都での茶道体験を思い出した。茶道は客をもてなす際の作法の一つでもあると聞いた私は、これはとても素晴らしいことだと思った。日本人は客を尊重し、客を親身にもてなしている。私は、日本人は「礼儀」を文化として継承しているのではなく、そうした習慣を自らに浸透させて代々継承しているのだと思った。

大学名：北京交通大学

氏名：原露恬

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本に来る前から日本人は礼儀正しく謙虚でマナーを重んじる民族だということは知っていたが、この8日間の旅により私のそうした印象はさらに深まった。またホームステイでの交流がその点をはっきりと認識させてくれた。

日本への出発の前からホストファミリーは私の緊張感を和らげ、互いの距離を近づけようと幾度もメールで私とやり取りし、娘さんはわざわざ微信(WeChat)をダウンロードし、私と交流をしてくれた。食べ物の面では、彼らは私が刺身を食べられるかなどを細かに聞き、さらにはホームステイの前に実際に食べてみて、もし苦手な場合はホームステイの際は他のものにしても問題ないと話してくれた。また私のためにわざわざお兄さんの部屋を片付け、そして様々なタオルから好きなものを選ばせてくれて、さらには可愛らしい私への歓迎の言葉を机の上に飾ってくれた。こうした細やかさに私はとても温かい気持ちになった。朝食の際にはご飯をよそい過ぎたかを聞き、食べる前には楽しそうに「いただきます」と言う。これは食べ物やそれらを作った人への感謝を示す言葉であり、こうした点はいずれも、彼らがマナーを重んじ他人を思いやっていることを示している。

企業訪問や文化体験などでは、皆が30度から45度の角度でお辞儀をして私たちを歓迎してくれた。エスカレーターに乗る際は皆が左側に立ち、右側を急ぐ人のために空けていた。日本の街中ではゴミ箱をほとんど見かけることがなく、皆がゴミを自宅に持ち帰って捨てていた。ゴミ箱のある場所では瓶、ペットボトル、缶、雑誌類、燃えるゴミ、燃えないゴミ等に分類されていた。電車内では暇そうに携帯電話をいじっている人も少なく、大声で電話に出ている人もいなかった。家や会社の中では外履きを脱ぎ、時間に正確に目的地に到着する。食事の際は茶碗を持ち、静かに食事をする。茶道では茶碗のきれいな部分を相手側に向け、吸い切りの音で茶の美味しさを表すといった事はいずれも日本人のマナーの表れである。中国は文明・礼儀の国ではあるが、日本のマナーや思いやりといったものについては私たちが学ぶべきだと思った。

大学名：北京交通大学

氏名：申婉玉

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

一橋大学の学生との交流で、私たちは就職の問題について討論をした。その際従業員の会社における地位の問題になり、日本の従業員は経験を積み年齢を重ねるほど待遇や地位も高くなり、業績とは直接の関連がないとのことであった。そして中国では年齢を重ねた従業員は技術と革新能力不足により会社から解雇されるといった危機に瀕し

ている。清華大学では博士号を取得し海外から帰国した教授であっても十分な研究成果がないという理由で離職の憂き目を見ている。こうしたことから、日本の従業員の集団帰属意識が強いというのも、それなりの理由があるからだということが分かる。

オムロン京都太陽での見学の際、私たちは同社が身体にハンデを持つ従業員の業務における利便性を高めるために業務設備をデザインし、新たなツールを開発し、彼らのプライドを守るため全ての従業員が同じ設備を使い業務を行う様子を目にした。同社はさらに従業員と設計スタッフが共同でツールの設計プランを作成している。これは彼らの身体機能を尊重するのみならず、知能の面からも彼らの能力と努力を認めていることを意味している。これほど身体や心をケアする企業への帰属感が強いのは当然のことである。

日本の従業員の企業への帰属感はこうした思いやりや理解が少しずつ積み重なってできたものであり、また企業の文化や真心がもたらす魅力や感動によるものであり、決して根拠のないことではなく、無理にこじつけたものでもない。これは中国の企業が改善すべき部分であり、現代の青年が頻繁に転職をする局面を如何にして変えていくかについては、こうした細かな部分から改善をしていく必要がある。

もちろん、企業の遅く安定した経営というのも帰属感が存在するための保障である。

大学名：北京交通大学

氏名：任二祥

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

かねてより日本人は非常に礼儀正しいというのは聞いていたが、実際に日本を訪れ、親切な彼らにはやはりとても驚かされた。

学校や企業での交流では、必ずと言って良いほど出迎えのスタッフが事前に私たちの到着を待っていてくれた。そしてお別れの際は私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。中島さんの話によると、「見えなくなるまで手でガラスを拭く」とのことであった。これは礼儀と言うよりは、一種の相手への尊重だと私は感じた。自分を尊重してくれる人と付き合いたくない人は誰もいないと思う。

ホテルニューオータニでの朝食の際は、入口のスタッフの笑顔とサービスでその日一日の良いスタートが切れた。お店での買い物の際は、店員さんがとても親切に、また常に笑顔で対応してくれた。企業の見学では従業員が仕事の手を休め、立ち上がって会釈で私たちへ挨拶をしてくれた。日本人には感謝の言葉やお辞儀また会釈の習慣があり、団員の一人は「この数日で自分の腰がだめになりそうだ」と話していた。このことから、日本ではお辞儀や会釈がいかに当たり前の事が分かる。

ホームステイの際、佳子お母さん一家は私をスカイツリーに連れて行ってってくれた。そしてエレベーターを待つ間、娘さんがわざわざ中国語のパンフレットを探してきてくれた。昼食の際は日本料理が好きかと聞かれ、私が少し苦手だと言うと、彼らは西洋料理のレストランでの食事に切り換えてくれた。夕食の際もまた刺身などの生ものはなく、火の通った料理であった。3人の娘さんもとても親切で、ゲームのルールを丁寧に教えてくれて一緒にゲームをして遊んだ。そして最も感動したのは、お母さんが事前にお風呂を沸かしてくれて、タオルや歯ブラシも準備し、私が最初にお風呂に入るように言うてくれたことであった。彼らは私がお風呂を済ませてからそれぞれお風呂に入った、これには私はとても感動した。

日本人のマナーはすでに彼らの民族的品性となっている。これは恐ろしい能力だが、また尊敬すべき能力でもある。私たちはこの強大な隣国に正しく向き合い、良好な日中関係を維持し、良い隣人となる必要がある。